【研究ノート】

大分県宇佐に残る伊藤金二郎の軍艦模型について
―その史料的価値―

安　松　みゆき

【概　　要】

大分県宇佐市の教覚寺に日露戦争や第二次大戦の軍艦模型が保管されてきている。製作した伊藤金二郎は同寺住職平田崇英の祖父にあたる。今回の調査より、伊藤の模型は、海軍への憧れに根ざしたとはいえ、優れた軍艦模型のため時代の中で大きな役割を担ったことがわかった。ヒトラーへの模型贈呈はその一例であり、日独関係の強化を演出する一要素になった。今後この稀有な歴史史料は修復の上、常設的に展示されることが望まれる。

【キーワード】

軍艦模型、伊藤金二郎、アドミラル・グラーフ・シュペー、ヒトラー
大分県宇佐市教覚寺

はじめに

大分県宇佐市の柳ヶ浦地区には、かつて宇佐海軍航空隊の基地があり、掩体壕などの戦争遺跡が残されていることは、よく知られている[1]。しかし同地区の教覚寺に、戦争に関わる珍しい遺品が保管されていることは、限られた人しか知らない。それは戦前に伊藤金二郎が趣味で製作した軍艦の模型であり、金二郎の孫にあたる教覚寺住職平田崇英氏の尽力により、本堂脇にスペースを設けて保管されている。現在残るのはおよそ20点弱のかなり大きな金属製の模型で、部分的に損傷や錆が見られるが、おおむね原型をとどめている（図１）。金属製であることや、細部までつくり込まれていることから、模型としての質の高さがきわだっており、工芸的価値を認めうる。

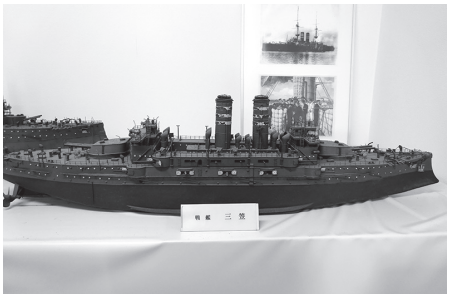

図１　伊藤の模型【三笠】

論者は戦前の日独美術交流研究の枠内で、両国間の贈答品を調査しているが、その関連で、宇佐出身のある画家について調べるなか、偶然ドイツ海軍の軍艦模型をつくってヒトラーに献呈した人物がいることを知った。教覚寺に保管される模型を製作した伊藤金二郎である。さらに当時の新聞などを見ると、後述するように伊藤の模型は個人の趣味の域を超え、太平洋戦争前夜の1930年代に、海軍に関係する展覧会や行事において大きな役割を果たしていたことが明らかになる。ヒトラーに献呈された事実も含めて、この軍艦模型は単に出来の良い模型であることに留まらず、歴史の証言としての史料的価値を有すると考えられる。これまで伊藤金二郎の軍艦模型についてインターネットでの紹介は見られるものの[2]、

テーマとしてとりあげた研究は管見の限り見あたらない。

そこで本稿では、伊藤金二郎の軍艦模型について概要を紹介し、ヒトラーへの献呈および海軍関係の展覧会出展を中心に、模型が活用された経緯や背景の事情を検討する。検討に用いた主な新聞資料は平田崇英氏が保管するものを閲覧させていただき、さらに平田氏からは伝聞や当時の事情などの貴重な情報をご教示いただいた。また論者が伊藤金二郎の存在を知ったのは、別府大学学長飯沼賢司教授からの情報による。両氏にはここに記して謝意を表する。

1　「軍艦翁」伊藤金二郎の生涯（図２）

教覚寺の平田崇英氏の作成した資料によれば[3]、伊藤金二郎は平田氏の母昭代氏の父にあたり、明治18（1885）年11月23日に兵庫県神戸市に生まれている。模型を製作するようになったきっかけは、港に停泊する軍艦を見て海軍に憧れたことによる。学生時代から模型をつくりはじめたという。当時の新聞にはもう少し詳しい説明がある[4]。伊藤金二郎は、神戸で育った家が油屋だったので、船会社とも取引を持っていたため、自然と波止場を遊び場とすることがあり、そこで船を眺めたとされる[5]。24か25歳のときには、すでに軍艦模型を70隻ほど作り上げていた。あくまでも模型作りは趣味の範囲であったとされ、新聞などからは、本業は電信局、あるいは鉄工業を経て不動産業を営んでいたという二説が見られる[6]。

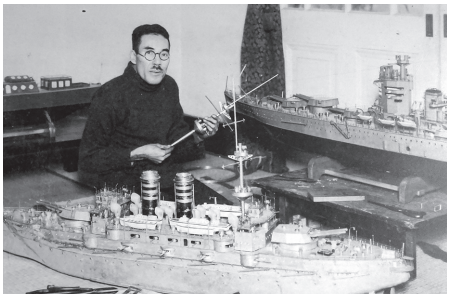

図２　模型を作る伊藤金二郎

47歳になると住んでいた大阪府豊中市蛍ケ池の家の小屋にひきこもって軍艦作りに専念するようになったという[7]。資金は貯めていた貯金から小出しにしていったようだ。完成した模型は後述するように実物の百分の一など縮尺が大きく、たとえば【三笠】（図１）の模型は121cmにも及ぶので、向かいの家に保管していたとされる。その向かいの家とは伊藤本人の家ではなく、意外なことに戦前を代表する俳優の大河内傳次郎の家であった。実は一世を風靡した大河内傳次郎は金二郎の妻みつの弟だったのである。

伊藤金二郎はいずれにせよ数多くの軍艦模型を製作し、「変わり者」あるいは「製作道楽の伊藤金二郎氏」[8]や「軍艦おじさん」「軍艦翁」と呼ばれるようになり、その後海軍の目にとまり、海軍主催の展覧会では必ずといってよいほど伊藤金二郎の模型作品が展示されるようになった。軍艦模型で一躍時の人となった金二郎であったが、日米開戦から間もない昭和17（1942）年３月１日に57歳で亡くなった。

2　製作された軍艦模型

「軍艦翁」と呼ばれたほどの腕前であった伊藤金二郎は、生涯にわたってどれだけの軍艦模型を製作したのか。昭和９（1934）年６月３日付の大阪新聞（夕刊）によると、50歳の伊藤金二郎が生涯にわたって製作した軍艦模型の数は、大小百程度と指摘されている[9]。また他の新聞では、30年前より軍艦模型の製作を道楽とし、「これまで進水したもの全部で560隻」を数えるという。「進水」とは、後述するが、無線で実際に水に浮いて動くようにつくられていたことを意味する。遺族の説明や他の新聞の記述を考え合わせると、おそらく後者に近い数の模型を製作していたと推察される。

ではどのような模型が作られたのかというと、日本海軍の大小さまざまな海軍艦船と、米英独

の艦船を製作していた。多くの作品は大阪海軍会館に展示されていたが、終戦の混乱で大半を失ったとされる[10]。そのなかで新聞で取り上げられるなどして艦名のわかるのは、以下の軍艦である。

戦艦【三笠】同【薩摩】同【扶桑】同【陸奥】同【榛名】同【摂津】巡洋艦【出雲】同【笠置】重巡洋艦【愛宕】軽巡洋艦【神通】同【夕張】駆逐艦【曙】同【追風】同【薄雲】水雷艇【友鶴】砲艦【熱海】潜水艦【伊１号】同【伊51号】

日本海軍については、著名な戦艦から小型の艦艇まで幅広く模型をつくっていることがわかる[11]。また第二次世界大戦に使われたものだけでなく、日露戦争の艦船も含まれている。製作されたことを確認できる外国の軍艦はつぎのとおりである。

イギリス：戦艦【ロドネー】[12]同【ネルソン】重巡洋艦【デボンシャー】
アメリカ：戦艦【ウエストヴァージニア】同【ペンシルバニア】航空母艦【サラトガ】
　　重巡洋艦【インディアナポリス】
ドイツ：小型戦艦【アドミラル・グラーフ・シュペー】

外国の軍艦では、ドイツの一例を除けば、後に敵国となるイギリスとアメリカの著名な艦船を製作したようである[13]。

当時において軍艦は第一級の機密情報であり、詳細な図面は入手できなかったであろうが、伊藤金二郎は写真を用いたり、日本の軍艦については実物を見たり、また近所の軍人からの助言を受けるなどして製作しており[14]、出来上がった模型は細部まで緻密に作り込まれている。後で詳しく見るが、模型の出来は日本海軍にまで評価されることになった。模型のおもな材質は金属であり[15]、モーターが組み込まれていて水に浮かべて動かすことができた。平田氏は、水に浮かべる場合、バランスをとるのが難しかったと伝え聞いている。

これら模型のなかで、教覚寺に残されているのは以下の模型であり、本堂側面の背面寄りに設けた専用の展示空間に保管されている。一部に損傷や錆が見られるが、よく原型をとどめている。

戦艦【三笠】同【扶桑】同【出雲】軽巡洋艦【神通】駆逐艦【薄雲】同【朝霧】同【如月】同【朧】水雷艇【友鶴】砲艦【熱海】潜水艦【伊１号】
イギリス戦艦【ロドネー】イギリス重巡洋艦【デボンシャー】アメリカ重巡洋艦【インディアナポリス】ドイツ小型戦艦【アドミラル・グラーフ・シュペー】

模型に関する情報をさらに拾ってゆくと、製作時間は、たとえば【陸奥】クラスの大きな戦艦を製作するには800時間を要し、１日８時間働いておよそ三ヶ月かかったとされる[16]。他の指摘によると【サラトガ】で900時間、【愛宕】で700時間、【陸奥】で900時間（【サラトガ】と同じ）、【神通】で400時間、【三笠】で600時間、【薄雲】は250時間、【ロドネー】で600時間（【三笠】と同じ）を要したという。

縮尺は、【三笠】【陸奥】【サラトガ】は実物の百分の一で、【ロドネー】【笠置】などは皆八十分の一とされ、その大きさの一隻の製作費用は40円前後だったという[17]。それらには電気モーターや、目的は不明だが、蓄音器の機器が中に装着されて無線で水面を走る仕掛けになっているのもあったという[18]。それでも伊藤金二郎は自分の製作した模型に満足せず、「まだまだ私の軍艦に欠点はあります、皆様のご指導をえたく思っております」の言葉を残している[19]。

こうして製作された伊藤金二郎の模型は、新聞資料を見ると大いに人気を博したことがわかる。たとえば、昭和９（1934）年６月３日の大阪新聞夕刊では、本人は模型を作って集めればよいと考えていたが、昭和 10（1935）年１月 18 日の大阪朝日新聞によれば、「軍艦おじさん」の異名をとる伊藤は、９日から 27 日まで海軍協会主催の「軍縮展覧会」に軍艦８隻を出品して人気を呼び、会場となった松坂屋から二百円の謝礼をもらっていた。また、同年 12 月 25 日の東京朝日新聞には、新宮家を創立した三笠宮には軍艦三笠の模型（図１）を献納しようとしていたことが報じられており、昭和 12（1937）年３月３日の大阪新聞の夕刊には、「旗艦『三笠』の模型を三笠宮家に献納。栄光に輝く伊藤金二郎翁」と題する記事が掲載され、実際に献納していたことが確認できる。これらの記事は、宮家への献納品となったことを通じて、伊藤の模型への高い評価を印象づけている。

３　模型と海軍

3.1.　展覧会に展示された模型

つぎに、伊藤金二郎の模型が趣味からはじまりながら、時代のなかで時の人となった経緯を考えてみたい。

新聞資料を見ていくと、伊藤の模型は当時の展覧会に展示される機会が多かったことに気づく。そこで具体的な展覧会で確認しよう。

まず、昭和 10（1935）年１月９日から 27 日まで行われた「海軍軍縮展」がある。海軍協会主催で大阪日本橋の松坂屋で、当時問題となっていたロンドン会議での撤退を多くの市民に認識させるために行われた。伊藤の模型が大きな展覧会で出品されたのは、おそらくこれがはじめてになるだろう。ここでは屋上プールで無線操縦で【ロドネー】【サラトガ】【三笠】（図１）【愛宕】（図３）【神通】が航行したことが伝えられている。

図３　軍縮展の伊藤（中央）と模型【愛宕】

四ヶ月後の５月 21 日には「海軍国防展覧会」が名古屋の松坂屋で行われた。主催は愛知県で、海軍協会や愛知県支部が共催した。「海国民の士気を喚起」と新聞の見出しがあるように、日本ではいかに海戦そして海軍が重要なのかを示す展覧会であり、時期的なことを思えば、その前の海軍の軍縮を受けた内容と見做してよいと思われる。ここで展示された伊藤の模型は、【陸奥】【ロドネー】【サラトガ】【愛宕】【神通】【薄雲】【潜水艦伊１号】などであった。

昭和 11（1936）年 10 月１日から一ヶ月の期間で海軍省、海事協会、大阪府および兵庫県支部後援の「海軍博覧会」が開催された[20]。「世界に輝く　皇国海軍の全貌を知れ」との見出しが掲げられ、日本海軍の歴史と現在の威容を広く周知する展示であった。阪神パークを会場として実施され、５つの展示会場が用意されていた。その最後の第５会場が軍艦模型に当てられ、伊藤金二郎の製作した模型「八尺余りの戦艦以下精巧模型十数隻」が展示された。それだけでなく野外にも 80 坪のプールが用意され、そこにも伊藤金二郎の無線で動く模型 10 隻が浮かべられた。

その後も、昭和 13（1938）年４月１日から５月 30 日までの会期で西宮球場および外苑で実施された「聖戦博覧会」において、伊藤金二郎の模型が「日本と列強」の分野で展示されている[21]。後援は陸軍省および海軍省、主催は大阪朝日新聞社であった。支那事変を受けて同年３月より国家総動員法が強行制定された時期の展覧会である。具体的に展示された伊藤の模型は、【扶桑】【三

笠】【ロドネー】【デボンシャー】【インディアナポリス】【サラトガ】【アドミラル・グラーフ・シュペー】【愛宕】【神通】【薄雲】【熱海】【曙】【追風】【夕張】【友鶴】【潜水艦伊１号】である[22]。

前述した三笠宮への献納と並んで高い評価を印象づける報道となったのは、大阪毎日新聞社主催で大阪日本橋の松坂屋で開催された「海の日本生活展覧会」である。そこに展示されていた伊藤金二郎の模型を、当時日本に併合されて日本の華族となった韓国の王族で陸軍軍人だった李王の李垠とその妻方子および次男の李玖とが鑑賞しに来ていた。大阪毎日新聞昭和 15（1940）８月 29 日では、プールに浮かべられた伊藤金二郎の巡洋艦【夕張】模型の実演を鑑賞する三人の姿を捉えた写真が掲載され、日本の軍艦模型への李王家の関心が大きく取り上げられた。昭和 16（1941）年５月 22 日には、伊藤の地元の豊中市に大阪府立豊中女子高等学校の校舎が完成し[23]、「豊中女高落成式展覧会」が開催され、そこに【愛宕】【神通】【如月】【伊１号】の模型が展示された。

ほかにも展示された具体的な模型は不明だが、昭和 11（1936）年４月１日から５月 10 日までの期間で姫津線の全通を記念して姫路市の主催で開催された「国防と資源大博覧会」や[24]、同年９月９日より 27 日まで大阪放送会館完成記念を祝して大阪市電気局公園、社団法人電気普及会の主催して開催された「躍進電波展」でも、伊藤の無線操縦の軍艦が人気を呼んで子供の足を止めたと書かれている。昭和 14（1939）年２月１日から２週間の会期で大阪ガスビル２階を会場にして帝国在郷軍人会東区連合分会の主催で大阪地方海軍人事部の後援による「軍艦展覧会」でも、伊藤金二郎の模型が展示されていた[25]。このころ伊藤金二郎の模型は盲学生に軍艦の知識を与える教材としての役割も担うことになる[26]。

昭和 15（1940）年 10 月に鹿児島朝日新聞社が主催して鹿児島市鴨池公園で開催された紀元 2600 年奉祝の「肇國興亜大博覧会」や[27]、伊藤金二郎没後だが、昭和 17（1942）年５月 19 日から 31 日に海軍協会・朝日新聞大阪本社主催・海軍省・情報省後援による「軍艦展覧会」に伊藤の模型が展示され、会場の様子が写真で伝えられた。

このように伊藤金二郎の模型は、昭和 10（1935）年から没後の昭和 17（1942）年の間に多くの展覧会に出品されることで広く知れ渡っていったことがわかる。

3.2.　海軍と模型

伊藤金二郎は、大阪新聞夕刊昭和９（1934）年６月３日のなかで、なぜ模型を製作するのか、という問いに対して、模型を売る対象としておらず、ただ好きで作っているということや、兵隊に行けない自分の境遇を哀れみ、それだからこそなんとか国家に貢献したいと考えていたことなどを述べている。そうしたかれの言葉のなかで注目されるのは、「この海事問題のやかましい時」であるため、海事思想の普及に力を注ぎたいと述べていたことである。

伊藤が述べている「やかましい海事問題」とは、「海軍軍縮」の問題である。大正 11（1922）年に主力艦・空母の保有量を制限したワシントン条約と、昭和５（1930）年に補助艦艇を制限したロンドン条約が昭和 11（1936）年 12 月末までの有効期限内に破棄の通告がなければ、自動的に両条約は延長されることになっていた。そのため昭和 10（1935）年に軍縮会議の開催も予定されていた。しかし日本側からすると、この条約が英米に比べ不利な状態であったため、是正を求めようとしたが、それは到底実現されるものでなかったという[28]。そのため昭和９（1934）年に日本は条約破棄を通告し、およそ１年後に日本は実際に第二回ロンドン会議を脱退して、無条約状態に入ったことはよく知られるところである[29]。

そうした政治的背景のもとに昭和 10（1935）年１月に「海軍軍縮展」が松坂屋で開かれ、そこに伊藤金二郎の軍艦模型が出展された（図３）[30]。時期的に考えると、まさに日本がロンドン軍縮会議の決議を破棄すると通告した昭和９（1934）年 12 月からわずか一ヶ月も経たないうちに、この軍縮展が実施されたことになる。当時の記事によると、会場では「海軍軍縮とは」「ロンド

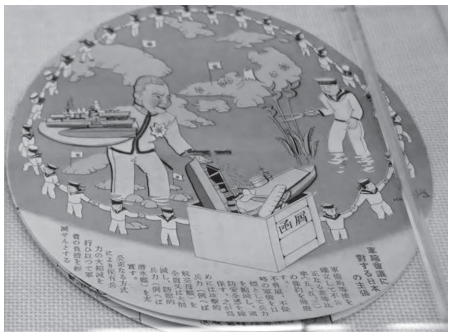

図４　軍縮展の一般向けパンフレット

ン条約とは」「もし会議決裂せば」「近代海戦とは」「ワシントン条約破棄の理由は」「日本の主張は、英米の主張は」「ロンドン予備会談」の項目をたてて展示がなされていた。この展覧会の二ヶ月前に東京の上野でも軍縮展が行われ、そこでは軍縮に反対するチラシが一般向けのパンフレットとして配られていた（図４）[31]。そこには、左側に空母や航空機をゴミ箱に捨てる海軍軍人と、英米日の軍艦保有率553の数字を見せる花のうち５を切り取っている水兵、そして丸いパンフレットを囲む形で手を繋いだ水平が日本を守る姿が描かれている。さらに軍縮会議に対して現状の不平等な保有率の均等権を主張して、たとえば潜水艦の充実により国の安全を目標としたことが記されていた[32]。また展覧会の新聞に掲載された宣伝チラシを見ると、軍縮の全貌は「非常時国民として知って置かねばならぬ」こととされ、そのために「大模型、実演などにて、どなたにも判り易く解説」することが強調されていた。

この「海軍軍縮展」は、日本がその後条約を破棄したことを踏まえると、通常の展示趣旨とは異なり、軍縮をすすめるのでなく、海軍軍縮の問題点を集約して、日本の軍縮条約破棄の正当性を明示する場であったと考えられる。そのことを勘案すれば、伊藤の軍艦模型は、単なる模型で終わらずに、「近代海戦をわかりやすく伝達した」と当時の記事にも書かれているように、海軍に代わって不平等な建艦を視覚的な理解で多くの人々に納得させる政治的なプロパガンダの役割を果たしたことが確認できる。そこに伊藤の模型が海軍に結びつき、新たな役割を得たことが認められるだろう。

海軍が伊藤の模型を展示に用いたことは、当然のことながら伊藤の模型が専門的にも評価しうる水準だったことを示している。軍艦模型は、伊藤がはじめて製作したわけでなく、明治43(1910)年の日英博覧会に展示された軍艦模型は横須賀および呉工廠が海軍からの発注で製作しており[33]、あるいは籾山艦船模型製作所がすでに明治45（1912）年に創業し、造船所や船主からの発注を受けて製作していた[34]。しかしその大半は固定された展示用の模型であったのに対して、伊藤金二郎の模型は個人の趣味の域でつくられ、また無線で動く特徴をもっていた（図５）。昭和11（1936）年10月１日より一ヶ月の期間で実施された「海軍展覧会」では、空前の規模として野外プールに十隻の模型で日本の海軍の編成を示していたとあり、そのような編成を示すには、動く伊藤の模型が大変センセーショナルで多くの人を魅了したことはまちがいないだろう。この展覧会のあとにも「海軍国防展覧会」などの海軍の関わる展覧会が続き、伊藤の模型が展示されていった。

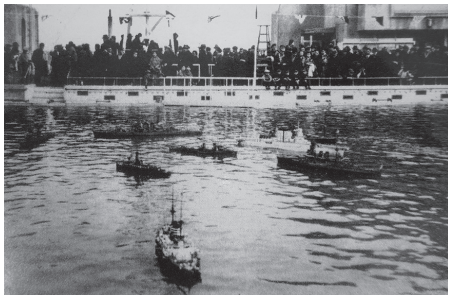

図５　屋上プールに浮かぶ伊藤の模型

こうした海軍と伊藤の模型との関係の背景には、一般にも模型への関心が広がっていた状況があった。たとえば、昭和15（1940）年頃に、高島屋で海軍省海軍軍事普及部の推奨する「我が海軍軍艦模型頒布会」が行われている。模型製作者の名前の記載はなく、伊藤の模型が含まれていたのかは不明だが、伊藤は販売を意図していないことを語っていたため、伊藤以外による模型と推察される。昭和17（1942）年には皇太子（現上皇）に軍艦陸奥の模型が献上されている記

事が認められるが、この製作者は伊藤でなく、川本八郎という人物が担当していた[35]。川本は、「聖戦博覧会」でも「アマチュア」として紹介され、巡洋艦夕張や巡洋艦愛宕などの軍艦模型を製作して「戦争と科学」の分野に展示している[36]。このように軍艦模型が広く流布し、模型を個人的に製作する人も出始めている。

子供もまた軍艦模型に夢中になる時代だった。昭和15（1940）年２月１日の読売新聞には、海軍省の後援で海洋思想普及のために子供を対象とした海の作文を募る記事が掲載された。その際に注目されるのは、入選者４名には大臣賞として軍艦模型が贈呈されると書かれていたことである。また菓子のグリコのおまけで軍艦模型が入手できるとするグリコの宣伝が昭和12（1937）年３月18日付の読売新聞に掲載されていた。実際に手に入る軍艦は長門、熊野、吹雪の模型であり、その模型は呉海軍工廠に許可されたものと書かれている。さらに広告には「又と得がたい」とか「二十六センチにちぢめた立派な模型です。誰が見てもキツト欲しがります」と記載されており、菓子のおまけでありながら模型はかなり本格的な印象を与え、子供たちが軍艦に関心を高め、さらに海軍に関心がいくように煽る戦略が取られていたことが理解される。

以上のように、伊藤金二郎は「海事思想の普及」に取り組むなど、海軍への憧れがあったと推察されるが、伊藤の模型は動く特徴を持ち、海軍軍縮という極めて困難な問題を視覚的に明示できる手段として、海軍から評価されて海軍の展覧会に展示されるようになった。当時には個人的に模型を製作する者も認められ、また子供を巻き込んで軍艦模型が人気を博し、いわゆる軍艦模型ブームのなかで、伊藤の模型は高い評価を得ていたことが、確認できる。

４　ヒトラーに贈られた軍艦模型

さて、伊藤金二郎がもうひとつ軍艦模型で評判を高めたのが、ドイツのヒトラーに軍艦を贈呈して喜ばれたというエピソードである。この件について触れた新聞記事としては、大阪毎日新聞昭和14（1939）年12月19日がある。この記事は、昭和14年12月17日に、ドイツの小型戦艦【アドミラル・グラーフ・シュペー】（図６）がウルグアイのモンテビデオ港外で自沈した、当時においては相当に有名な出来事について、シュペー号艦長の書簡などとともに伝えているが[37]、その一年前の昭和13（1938）年１月19日に、伊藤が製作した同艦の模型を「防共の盟邦」ヒトラーに贈呈していたことが触れられている[38]。なお贈呈の日は別の昭和14（1939）年１月５日の大阪朝日新聞ではその新聞の日付頃に完成したとあり、一年のズレが認められ、贈呈の時期に二説があることがわかる。とはいえ、ヒトラーを「防共の盟邦」と形容しているように、昭和11（1936）年11月の日独防共協定の締結以来、日独両国間でさまざまな文化交流や贈答が行われており、伊藤の模型もその一角に位置を占めていたと思われる。

図６　伊藤の模型
【アドミラル・グラーフ・シュペー】

【アドミラル・グラーフ・シュペー】の模型は長さ約四尺の大型で、かなり精巧に作られていた。新聞によると二隻製作されている。そのうちのひとつがヒトラーに寄贈され、もうひとつは現在教覚寺に保存されているものであろう。ヒトラーには駐日ドイツ大使オイゲン・オットが仲介したとされている。しかしその後の昭和14（1939）年12月19日の大阪毎日新聞を読むと、模型はドイツ大使館に留め置かれ（図７）、ヒトラーの手元には送られていなかった。それでも伊藤金二郎には、ヒトラーからの感謝状と、サイン入りのヒトラーの肖像写真とが贈られている。肖

大阪毎日新聞　昭和十四年十二月十九日

鐵則の自爆

駐日ドイツ武官語る

図７　大阪毎日新聞
武官ドイツ大使館付き海軍武官ヨアヒム・リーツマン大佐と伊藤の模型

像写真はいまでも遺族の手元にあるが（図８）、礼状は戦火で焼失したという[39]。

伊藤金二郎の模型はヒトラーに寄贈されたのであって、ドイツ大使館ではなかった。おそらくドイツ大使館に置かれていた理由は、ドイツ大使館付き海軍武官ヨアヒム・リーツマン大佐によるものと推察される。というのは、前述したように、当時国際的にも大きな話題となった戦艦【アドミラル・グラーフ・シュペー】が[40]モンテビデオ港外で自沈した２日後の、昭和 14（1939）年 12 月 19 日の大阪毎日新聞に、かれの記事が掲載されたからである（図７）。

シュペー号の艦長で、ピストル自殺を遂げたハンス・ラングスドルフ大佐が[41]、新聞によると、リーツマン大佐の親友であり、兵学校で一級下の学年だった。リーツマン大佐は、ラングスドルフ大佐が粘り強く最後まで脱出を試みながら、十分の修理もできず多数の優秀な英軍艦を相手に到底戦いを交えることができないと悲壮な決意のもとに大西洋上で散っていった、と最期の悲劇を推測していた。時系列で見るならば、【アドミラル･グラーフ・シュペー】の悲劇は、伊藤金二郎がヒトラーに模型を寄贈後に偶然にも生じていた。しかし新聞では、このリーツマン大佐の意向で模型は駐日ドイツ大使館に置かれたように推察させる記述となっていた。伊藤の模型贈呈の報告だけが本国に送られて、ヒトラーの礼状と写真が伊藤のもとにもたらされたのである。いずれにせよヒトラーから礼状と写真とが返礼されるほどのドイツ側の感謝ぶりは、伊藤の模型【アドミラル・グラーフ・シュペー】が、実際の最期に運命的に重なることで、日独の関係の強化を演出する一要素になったことを示していると把握すべきであろう。

図８　伊藤に贈られた
ヒトラー肖像写真

最後に伊藤に贈呈されたヒトラーの肖像写真に注目してみよう。この写真では（図８）、脱帽のヒトラーが制服を着て、右側を見据えた横向きで、両腕を組んだ上半身の構図がとられている。演出も印象的である。暗闇のなかで右方向を腕組みして凝視する顔に照明が当てられており、まさに英雄の肖像としての表現が強調されている。下の枠の余白にはヒトラーのサインが認められる。ヒトラーは贈呈を受けたときには、自らの肖像写真を返礼に贈ることは他にもあった[42]。たとえば笹川良一がヒトラーと会見できずに帰国したことをヒトラーが気の毒に思って写真３点を贈ったという。また日本刀を岐阜県の美濃刀匠擁護会より贈呈されたときにも、返礼としてヒトラーの肖像写真が贈られている。とはいえヒトラーがいつでも返礼をしていたわけではない。ヒトラーには様々な品々が贈呈されているが、その多くには返礼はされておらず、写真と礼状が届く場合は、やはり特例として考えるべきだろう。ヒトラーの写真にはイメージの流布への貢献が推察されるが、ヒトラーの肖像写真のイメージ化や贈呈については別稿でとりあげるためにここでは割愛する。

おわりに

大分県宇佐市の教覚寺に日露戦争や第二次世界大戦にかかわる軍艦模型が保管されてきている。製作した伊藤金二郎は、教覚寺住職平田崇英氏の祖父にあたる。伊藤の模型は、海軍への憧れに根ざしたものとはいえ、優れた軍艦模型であることから、時代のなかで大きな役割を担うことになった。ヒトラーへの模型贈呈はその一例であり、奇しくも贈呈後に悲劇の自沈を遂げたドイツの軍艦となったことも加わって、日独関係の強化を演出する一要素になった。

本来は個人の趣味の域にあった伊藤の模型に、素人の道楽を超える意味を与えたのは、海軍の関与によるものであった。その当時には伊藤以外に個人で模型を製作する者も認められ、また子供を巻き込んで軍艦模型が人気を博していた、いわゆる軍艦模型ブームのなかで、伊藤金二郎の模型は動く特徴もあり、高い評価を海軍から得て、特に「海軍軍縮展」が象徴的だが、当時の時代の歴史的動向に対して重要な役割を果たしていたことが明らかになった。

このように伊藤の模型は、高度な金属加工と、動く模型を実現させた技術の高さとを示しているが、個人の趣味を超えた歴史的な視覚史料としての意味も持ち得るものである。遺族の尽力により、当時の展覧会に展示されながら、戦争の惨禍を逃れ、保存状態はある程度良好といえる作品が多い。とはいえ、部分的に錆が出ていたり、また破損部分があるために展示できない模型があることも事実である。今後この稀有な歴史史料を修復の上、常設的な展示をされることを最後に提言したい。

謝辞

本稿をまとめるにあたり、教覚寺住職平田崇英氏、別府大学学長飯沼賢司教授、松坂屋一般財団法人Ｊ・フロントリテイリング史料館事務局次長河村誠氏には資料および情報提供をいただきました。心よりお礼を申し上げます。

図版出典

図版１、６筆者撮影

図版２　大阪朝日新聞昭和 10 年１月７日より（平田氏所蔵）

図版３、５、８平田氏所蔵

図版４インターネットより

図版７　大阪毎日新聞昭和 14 年 12 月 19 日より（平田氏所蔵）

Abstrakt:

Die Modelle der Kriegsschiffe vom Russisch-Japanischen Krieg und Zweiten Weltkrieg sind im Tempel Kyokaku-ji in der Stadt Usa, Präfektur Oita aufbewahrt. Kinjiro ITO, der Hersteller dieser Modellen, ist Großvater des Priesters von diesem Tempel, Soei HIRATA.

Diese Untersuchung ergab Folgendes : ITO sehnte sich nach der Marine und machte diese Modelle. Da diese Modelle hervorragende Qualität sowohl in der Genauigkeit als auch in der Beweglichkeit zeigten, spielten Sie in der Vorkriegszeit eine große Rolle. Beispielsweise wurde sein Modell des deutschen Schlachtschiffs "Admiral Graf Spee" für die Verstärkung der deutsch-japanischen politischen Beziehungen an Hitler geschenkt.

Es ist zu hoffen, daß in Zukunft diese Modelle als seltene historische Quelle restauriert und dauerhaft ausgestellt werden.

[1] たとえば宇佐の掩体壕などは以下に紹介されている。『建築MAP 九州／沖縄』TOTO出版，2008年、177頁。宇佐海軍については地元宇佐市で「豊の国宇佐市塾」が未来に向けて総合的に調べて冊子にまとめている。今回の伊藤金二郎の孫にあたる平田氏はこの塾長であり、また冊子の発行責任者として尽力している。『宇佐航空隊の世界』I~IV、豊の国宇佐市塾、1992年～1999年。体験談の記録やマンガ版は以下のとおり。今戸公徳『遥かなる宇佐海軍航空隊―併載・僕の町も戦場だった』光人社、2016年。『宇佐学マンガシリーズ 四 宇佐海軍航空隊史　かつて戦場だったふるさとの物語』大分県宇佐市編、マンガ瀬井恵介、梓書院、2015年。

[2] 軍艦の研究としてはたとえば以下のようなものがあげられる。矢野吉治「海事博物館企画展『船舶模型から学ぶ人・海・船―海運の過去・現在・未来―』」『海事博物館研究年報』42，2014年、1-3頁。他に民俗の分野では「船模型・船図・船絵馬」『日本常民文化研究所年報』2014年、８-11頁。和船だが、模型制作者に注目したものとして昆政明「和船の歴史と造船技術―「近藤友一郎話船模型の世界」―」『日本常民文化研究所年報』2014年、42-43頁。田村欣也「模型船と実船との相関の研究」『the Japan Society of Naval Architects and Ocean Engineers』船の科学館所蔵　日本軍艦模型コレクション」『世界の艦船』808，2014年、142-145頁。松井広志『模型のメディア論　時空間を媒介する「モノ」』青弓社、2017年。

[3] 平田崇英氏によれば、所蔵する資料のうち新聞資料は大阪の図書館でコピーしたものであり、写真資料は手元にあったとされる。それらを元にして伊藤の生涯をまとめてパネルにして展示している。

[4] 大阪朝日新聞　昭和10年1月7日。

[5] 大阪朝日新聞　昭和10年1月7日。

[6] 平田氏からは両方の仕事についていたと考えられるものの、両仕事に従事したのが短期間だったり、また賃貸住宅での家賃収入で生活していた可能性もあり、はっきりとしないとの回答を得ている。

[7] 大阪新聞夕刊　昭和９年６月３日。

[8] 大阪新聞夕刊　昭和９年６月３日。

[9] 松坂屋海軍軍縮展号　昭和10年1月。

[10] 大阪朝日新聞　昭和10年1月7日。

[11] 野沢正氏の『日本軍艦100選』（秋田書店、1971年）を参考にすると、野沢氏は「はじめに」において常識的に歴史上重要なもの、技術的に注目されるもの、過去の艦種を知るために重要なものとする基準から100選を実施したことが記されている。その順位に沿って、本論でとりあげられる戦艦の順位は次のとおり。【三笠】15位、【榛名】24位、【扶桑】26位、【陸奥】31位、【神通】50位、【夕張】51位、【愛宕】55位、【友鶴】76位となる。

[12] ロドニーのことを指す。

[13] Prince of Wales King Georg 5といった新しい戦艦は加えられていない。

[14] 松坂屋海軍軍縮展号、昭和10年1月。豊中町の金子忠吉海軍少佐から色々と御指導を仰ぎ、大分楽になったという。

[15] 鉄板が使われていた。

[16] 大阪朝日新聞　昭和14年12月19日。１日に14時間かけることもあったという。

[17] 大阪新聞夕刊　昭和９年６月３日。

[18] 大阪朝日新聞　昭和10年1月7日。

[19] 松坂屋海軍軍縮展号　昭和 10 年 1 月。
[20] 海軍博覧会　大阪毎日新聞　昭和 11 年 9 月 26 日。
[21] 聖戦博覧会出品目録　昭和 13 年 4 月 1 日－ 5 月 30 日　阪急電鉄西宮球場および外苑　後援　陸軍省　海軍省主催大阪朝日新聞社。監修橋爪紳也『別冊太陽　日本の博覧会　寺下勁コレクション』平凡社、2005 年、162-163 頁。
[22] 図録の記載順に準じている。
[23] 平田氏の所蔵する新聞記事だが、年代および月の部分が切り取られている。記事のなかで 22 日に落成式を行ったことだけがわかっていた。そこで豊中高女をキーワードに調べ、現在大阪府立桜塚高等学校であり、その沿革のなかで 1941 年 5 月 22 日に豊中高女の校舎の落成式が挙行されたことが記載されていた。それを今回支持している。同校の HP のサイトは以下のとおり。https://sakurazuka.ed.jp/history/
[24] 軍艦模型池が作られ、そこにリモコンで艦艇が動く展示がなされたとの指摘がある。また、写真も残されている。監修橋爪紳也『別冊太陽　日本の博覧会　寺下勁コレクション』平凡社、2005 年、150-151 頁。Wikipedia「国防と資源大博覧会」https://ja. wikipedia. org/wiki/ 国防と資源大博覧会
[25] 軍艦展覧会昭和 14 年 2 月 1 日－ 2 月 14 日会場　ガスビル 2 階会場主催　帝国在郷軍人会東区連合分会後援　大阪地方海軍人事部。
[26] 大阪毎日新聞　昭和 13 年 6 月 21 日。
[27] 紀元 2600 年奉祝本社創業 40 周年記念　大阪毎日新聞　昭和 15 年 10 月 13 日。大阪毎日新聞　昭和 15 年 10 月 13 日。
[28] 江口圭一『昭和の歴史　4　15 年戦争の開幕』小学館、1982 年、291-292 頁。
[29] 河尻融「ワシントン海軍軍縮条約破棄問題　―日米関係の変化の観点から」『法學政治學論究：法律・政治・社会』Vol.100. 慶應大学大学院法学研究科、2014 年、1 -28 頁。本名龍児「100 年前のパンデミック及びワシントン体制が現代に示唆するもの　―加藤友三郎と旧日本海軍を軸に―」（海上自衛隊幹部学校 SSG コラム 181.2020/12/17 より）ロンドン海軍軍縮条約問題が軍内部にファシズム運動を本格的にスタートさせた契機になったという指摘があり、海軍軍縮条約問題はこの時代において重要な動向として捉えられている。須藤慎一「昭和恐慌とファシズムの台頭」由井正臣編『近代日本の軌跡 5　太平洋戦争』吉川弘文館、1995 年、32-38 頁。
[30]「海軍軍縮展」（『東京朝日新聞』昭和 9 年 11 月 11 日朝刊 10 面）。 玉井研究会「1935,6 年の危機と日本のマスメディア」『政治学研究 60 号』2019 年、329-331 頁。東京の松坂屋でも昭和 9 年 11 月 1 日から 27 日まで実施され、大角海軍大臣が視察していた。『上営販売時報』昭和 9 年 12 月 1 日、8 頁。この資料は松坂屋一般財団法人 J・フロントリテイリング史料館事務局次長河村誠氏からの資料提供による。ここで深謝申し上げたい。
[31] パンフレットは呉海事歴史博物館「大和ミュージアム」に所蔵されているという。コロナの関係で確認ができていない。https://blog.goo.ne.jp/raffaell 0 /e/5536abb97d749674c4faa0cc7df9b673
[32] 呉海事歴史博物館「大和ミュージアム」所蔵されているとされ、インターネットの画像から確認した。
[33] 朝日新聞朝刊　明治 42 年 12 月 15 日。他にも、新聞の広告によれば、東京の本郷で軍艦模型を製作している小林甚三郎の名前が見られる。朝日新聞朝刊　明治 45 年 7 月 20 日。皇孫殿下が軍艦の玩具で遊び、それは教育上必要なことが新聞でも紹介されている。朝日新聞朝刊　明治 43 年 10 月 7 日。日本で一番古い軍艦模型は、徳川時代に出島のオランダ商館に徳川幕府が嘉永 6（1854）年に依頼したもので、「観光丸」と名付けられているという。朝日新聞朝刊　昭和 14 年 11 月 17 日。

[34] 籾山艦船模型製作所も、海軍と結びついていたことが指摘されている。籾山では独自の銀製模型を製作していた。籾山艦船模型製作所については以下を参照。泉江三「わが国艦船模型の草分け：籾山艦船模型製作所について」『日本軍艦模型写真集、伝説的な籾山模型ここに甦る、世界の艦船　別冊』海人社　2008年、90-93頁。「籾山艦船模型製作所」https://ja. wikipedia. org/wiki/籾山艦船模型製作所。「『籾山模型の魅力』～創業100年父子二代で生み出した珠玉の艦船模型～」https://zousenshiryoukan.jasnaoe.or.jp/column/2437/10/

[35] 読売新聞　昭和18年5月28日。なお伊藤の弟子ができたと報道する記事がある。昭和14年1月5日の大阪朝日新聞である。新聞では、13年9月大阪天王寺区道胴山通2丁目日本羊毛工業組合主事赤尾氏の長男で当時27歳の赤尾清夫が器用で、伊藤に私塾していたことから、弟子入りをしたという。その後赤尾清夫による模型の記事は見当たらないが、弟子入りした後の模型製作において伊藤を助けていた可能性は高い。

[36]『支那事変　聖戦博覧会大観』朝日新聞社、昭和13年、14頁。

[37] 自爆するシュペー号については大々的に新聞に取り上げられている。たとえばUP特派員が飛行機に搭乗して伝えている。一部の乗務員はぎりぎりで避難していることもわかる。艦員全員は無事で、艦長が爆死し、ドイツ魂を見せ「伝統輝く“船の切腹”商船九隻撃沈のシュペー号　艦名縁りの名帝国と同地に消ゆ」と書かれている。大阪毎日新聞　昭和14年12月19日。東京朝日新聞朝刊　昭和14年12月16日によれば、修理してもまた出港すると、敵が待っていて再び海戦になり、シュペー号には逃げ場を失う状況があったことがわかる。シュペー号について連日報道されている。朝日新聞夕刊　昭和14年12月17日。同新聞　昭和14年12月18日。また日本ではドイツ側に同情的だったという記事も見られる。最終的には設計機密もあり、ヒトラーから館長に指令があったと伝える記事もあるが（朝日新聞　昭和14年12月19日）、同新聞夕刊　同年12月22日によれば、ヒトラーは生き残る命令を出してきたので、自殺を引き延ばしたことが、遺書などによってわかったという。12月21日の女性の声というコーナーにも、グラフ・シュペーについて話題となっているが、宮内鎮代子という女性は、ドイツ魂の表現として称賛するが、艦長以下の心痛を思うと悲壮でしかないことを吐露している。またシュペー号へのやり返しとしてドイツの潜水艦が英国の汽船を撃沈している記事もある。朝日新聞　昭和14年12月21日。艦長の自殺については朝日新聞　昭和14年12月24にも認められる。シュペー号の自爆の写真が朝日新聞　昭和14年12月30日に掲載されている。のちに朝日新聞ニュース映画が披露されて、ドイツと英国の大使館員が鑑賞したという（朝日新聞　昭和15年1月12日）。英国では映画化する計画も出ていた（朝日新聞　昭和15年4月14日）。

[38] なお贈呈の時期は三ヶ月前の説もある。大阪朝日新聞　昭和14年1月5日。

[39] 遺族の平田氏の指摘による。

[40] 朝日新聞　昭和14年12月20日にもとりあげられており、シュペー号の自爆は、英国側の罠にかかったためと推察されている。またシュペー号を描いていた画家中村研一の存在が朝日新聞には14年12月20日に写真とともに報じられている。中村は渡英してカレージアス号をスケッチして描いた経験を持っていた。昭和15年10月に鹿児島朝日新聞社が主催して鹿児島市鴨池公園で開催された紀元2600年奉祝の「肇國興亜大博覧会」にもジオラマで「シュペー号の最後」として展示されている。『肇國興亜大博覧会誌』鹿児島朝日新聞社、昭和17年、35頁。

[41] 朝日新聞朝刊　昭和14年12月21日。館長は遺書を残して、乗組員全員が収容所に落ち着いたのをみてピストル自殺を遂げたことを伝えている。

[42] この問題については別稿で述べる予定のため、ここでは詳細は割愛する。
テーマとしてとりあげた研究は管見の限り見あたらない。